

高木仁三郎市民科学基金 助成研究/研修 中間報告書

提出日：2006年6月23日

1. 氏名・グループ名及び研究テーマ

氏名(グループ名)	樋口倫代
連絡先・所属など	ロンドン大学衛生学熱帯医学大学院、公衆衛生政策学部、 公衆衛生博士課程 Michiyo.Higuchi@lshtm.ac.uk
調査研究・研修のテーマ	東ティモール地方保健所職員の医薬品使用の向上をめざして - 標準治療ガイドラインとそのトレーニングにさらに何が 必要なのか？
研修先の機関・名称など <研修の該当者のみ>	

2. 調査研究・研修の経過

現時点で研究は終了していない。(2007年終了予定。)以下のような経過で現在進行中である。

- 2004年8月～12月 「Professional Attachment (課程の必須課題)」(東ティモール)
- WHO東ティモール「臨床看護師トレーニングプログラム」インターン
- 2005年1月～5月 「Professional Attachment Report」作成(ロンドン)
- 臨床看護師トレーニングプログラムのマネージメントを分析
同時進行で論文調査準備
- 先行研究レビュー
- パイロットプロジェクト準備
- 所属機関研究倫理委員会申請書作成
- 2005年6月～7月 パイロットプロジェクト(東ティモール)
- 外部アドバイザーとの打ち合わせ
- 保健省への許可・協力依頼、現地関係機関とのコンタクト
- 事務所開設
- 通訳・助手リクルート
- 関連資料収集
- 2保健所で予備調査
- 予備調査結果報告書作成
- 2005年8月～10月 研究プロポーサル作成(ロンドン)
- アドバイザリーコミッティーミーティング
- プロポーサル審査(公開プレゼンテーション)
- 2005年11月～ メインプロジェクト(東ティモール)
- データ収集ツール作成
- フィールドガイドブック作成
- 調査員リクルート
- スタッフトレーニング
- 3保健所でプレテスト
- 関係機関、調査対象保健所との連絡
- データ収集(5月末現在、対象20保健所中15ヵ所終了後、休止中、残り1ヶ月程度かかる見込み)

3. 調査研究・研修の成果

テーマ、研究方法などについて（特に、申請時からの追加、変更点）

- 研究テーマは、「物的人的資源に限りのある東ティモールの地方の保健所での、医薬品の適切な使用」についてである。このテーマは申請時から変更はない。先行研究レビュー、パイロットプロジェクトなど経て、以下の研究目的を設定した。1)保健所職員による医薬品の使用（処方、投薬）と標準治療ガイドラインに対するadherence（きちんと守られていること）の現状を説明する。2)adherenceに影響を及ぼす因子を明らかにする。3)保健所で医薬品をより適切に使用するためのストラテジーを、特に、標準治療ガイドラインとそれを導入するトレーニングの点から提言する。
- 研究方法は、量的手法と質的手法を併用したケーススタディーとし、データ収集方法にはやや変更を加えた。現在用いている方法は、1)2005年の患者台帳からのサンプリング、2)保健所での直接観察（診察室および投薬カウンターでのチェック、出口での患者の服薬についての理解度確認）、3)看護師へのインタビュー、の3つである。
- 調査の主対象は地方無床保健所の看護師である。飛び地を除く全国の無床保健所からランダムサンプリングした20保健所を対象に、患者台帳からは100ケース/保健所、直接観察は30ケース/保健所、インタビューは3人/保健所とした。規模は申請時より拡大しているが、これは、高木基金の助成金の後、Traveling Scholarship（イギリス）と研究助成金（日本）もいただけることになったことで可能となった。

各滞在ごとの成果

- （1回目、助成金申請前）「Professional Attachment Report」は組織マネジメントの分析、という博士論文とは別の課題であり、また、論文とリンクさせることが推奨されているわけではない。しかし、論文のテーマの中で保健所の「臨床看護師」と彼らが使用する標準治療ガイドラインに注目していたため、敢えて東ティモールの臨床看護師トレーニングプログラムで勤務することを選び、インターンとして主に評価を担当した。この間、勤務の内外で研究に関わる情報を幅広く収集した。
- （2回目、高木基金助成金による）パイロットプロジェクトは、主に調査の環境を知り、チェックリストや質問票、サマリーシートなどのデータコレクションツールを開発すること、対象を明確にすること、ロジスティックを確立すること、などを目的とした。（データ収集方法を変更しているため、この2保健所での予備調査結果は最終分析には含めない。）この間に事務所を開設し、また、保健省プロポーサルレビューパネルの許可を得た。
- （3回目、他助成金、奨学金による）メインプロジェクトは、11月より開始し、スタッフトレーニングを含めて準備に約4ヶ月を費やした。トレーニングの一部は、外部アドバイザーに講師を依頼し、保健省トレーニングセンターの職員3人を招待した。なお、調査のスタッフはアシスタント・通訳2人、調査員6人、ドライバー2人である。2月末から地方の保健所でのデータ収集を行っており、現在15保健所で終了した。データ収集完了は7月末ころまでを目標としている。

その他

- メインプロジェクトを開始した後の2005年末、保健省は政策を転換した。すなわち初期（前身）のころより、無床保健所レベルに医師は配置できない、しない、と主張し続け、「物的人的資源に限りある」という前提で新しい保健計画をうち立てていたが、キューバ政府の援助が得られることになり、病院のみならず無床を含めた全ての保健所にキューバ人医師が配置されることになった。臨床看護師のトレーニングの1クールが終了し、各保健所に1人ずつ配置され、2人目のためにトレーニングを継続するかどうかの議論がなされていた頃である。この研究の重要な対象である臨床看護師と「標準治療ガイドライン」も位置づけが変わる可能性が考えられたため、保健省保健政策計画局長に質問したところ、「職種によって使い方に違いはあるにしても、標準治療ガイドライン自体は今後も継続して使用していく。本年中に今までのレビューをするので、あなたの研究結果もそのインプットのひとつにしたい。」との回答を得た。よって、今までどおりの方針で研究を継続することにしている。

4. 対外的な発表実績

- 研究はまだ終了していないので、研究内容そのものの対外的発表を行うには至っていない。
- Professional Attachmentは、インターン中の業務の結果をWHOに「Assignment Report」として提出、課題としては「臨床看護師トレーニングプログラムマネージメント分析」を所属先に提出した。また、WHOの許可を得て、評価の結果の一部を、第20回日本国際保健医療学会総会でポスター発表した。
- パイロットプロジェクトの2保健所で得たデータの簡単な集計と分析は、それぞれの保健所、管轄の県保健局、保健省のリエゾン担当者およびプロポーサルパネルへフィードバックした。

5. 今後の展望

- 現在、東ティモールは、政情、治安が不安定になっている。直接のきっかけは国軍内の待遇差別問題に端を発して3月に除名された元兵士たちが、4月24日から抗議行動を起こしたことであるが、以降、多くの憶測が首都ディリを中心とした市民の生活を翻弄した。結局5月23日からの軍隊と離脱兵士との銃撃戦にまで発展し、警察も攻撃され地方に避難するなど機能しなくなったため首都は無法地帯となった。日本の外務省は5月27日より、ディリ市に退避勧告、それ以外に渡航延期勧告を出している。今は、国際軍の治安維持活動により小康状態のようであるが、首相の引責辞任を要求する世論が高まる中首相は続投を堅持しており、来年の総選挙、大統領選挙までは安定しないものと予想されている。このことは、5月はじめころから我々の調査活動にも影響をきたし、5月26日以降は一時中断を余儀なくされている。ただし、今回は1999年の騒乱とは異なり、治安悪化はディリと一部地域のみに限局していて、地方では今までとあまり変わらない生活が営まれているようである。一刻も早く東ティモールへ戻り、調査を再開、完了することを希望している。
- 東ティモールへ戻った後は、予定通り2006年10月はじめまでには、データ収集を含めた3回目の東ティモール滞在を終了し、2007年中ごろまでに研究を終了することを目標としている。
- 博士論文のコピーを東ティモール保健省を提出することは、プロポーサルパネルからの条件のひとつであるが、単に提出する以上の方法を考えたい。インドネシア語サマリーを添付することや（今のところ現地語訳は困難と考える）、対象の保健所マネージャーと管轄の県保健局長も招いてワークショップのようなものも開催するなど、研究対象者へより直接的にフィードバックする手段を工夫したい。
- 博士論文の内容を学術誌に投稿することは、その後の目標の一つである。このことは、所属先からも強く推奨されている。また、2007年に「第3回医薬品向上に関する国際会議」が開催される予定だが、これに演題提出することがもうひとつの目標である。学術誌や学会への発表はアドボカシーの重要手段であると考えている。ひとつには、研究内容がレビューされることで対象地での信頼を増し、また、もうひとつには、同様の状況にある地域への一般化、応用のための考察を行うことで、より汎用される可能性が出るからである。
- 高木基金を含めて、いただいている3つの助成金・奨学金への報告、成果発表を通じて、積極的に専門分野外の人々へもフィードバックを行って行きたい。

7. 高木基金へのご意見

柔軟な使い方を許可していただいたことで、研究の幅と、規模を拡大できたことに大変感謝している。高木基金はいちばん初めに決定した助成金であるが、その後他に2つの助成金・奨学金がいただけることになった。そこで、予算計画を大幅に変更し、高木基金はパイロットプロジェクトに特化して使わせていただいていた。十分なパイロットを行えたことは、メインプロジェクトにとって、大変有効なステップとなった。